は上古の自語なれば、日の訓をかりて、火をひといふなるべし、ひるといふことばは、日より出たり、日は母語也、ひるは子語也、子語を以母語をとくべからず、

〔東雅一天文〕日ヒ　ヒとは靈也、上古の時、凡そ物の靈なるを稱してヒといふ、されば後に漢字を借用ひられしにも、靈の字を讀て、ヒとは云ひしなり、舊事紀には產靈の字讀てムスビとせられしを、古事記には產巢日と云るして、讀てムスビとせしが如き、卽是日といふは、靈の義なるが故也、

〔倭訓栞前編二十五〕ひ　日をいふは、明らかにましますを、自然にかくいひ初めし語なり、日出の大さ富士山の如く、寅時より深紅なるは、土佐南海の眺望、志州鳥羽の漂船の視し所も、同じ大きく見ゆるは、地水の陰氣を含める故なり、出る時は遠し、地より十七萬里、日中は近し、地より十五萬六千五百里なりといへり、

〔八雲御抄三上天象〕日　あまひこ異名也　あかねさす万にはあかねさす日とよめり　うちひさすみやちとつづけたり　又あまつたふ　又わたる春日ともいへり万度とかけり、　たかてらす是は帝御事也、但寄日可詠也、　但朝日かげにほへる山　あさつくひ　夕つくひ　あさ日　ゆう日　春日　ながし入

〔古事記上〕於是詔之、此地者向韓國眞來通笠沙之御前而、朝日之直刺國、夕日之日照國也、略下

〔曆林問答集上〕釋日第三

或問、日何也、　答曰、定象紀云、日大陽之精也、又五經通義曰、陽以一起、故日行一度、陽成於三、故中有三足烏、又云、日火精、陽烝也、外熱內陰、象烏之黑也、白虎通云、日徑千里、周三千里、下於天七千里、日一南萬物死、日一北萬物生、故夏陽盛而陰衰、故晝長夜短、冬陰盛而陽衰、故晝短夜長、日行陽道長、出入卯酉之北、行陰道短、出入卯酉之南、春秋陰陽等、故行中道、晝夜等也、漢書天文志云、日君之象也、君行急則日行疾、君行緩則日行遲、是以觀乎天文、以察乎時變、

〔日本書紀一神代〕伊弉諾尊、伊弉冉尊共議曰、吾已生大八洲國及山川草木、何不生天下之主者歟、於是